

佐賀県
景観情報誌
vol.5

美 さが

特集
秘窯の里 大川内山

ひょう さと おおかわちやま
秘窯の里 大川内山

およそ30の窯元が軒を連ねている。狭い谷間にレンガ造りの煙突や窯元が立ち並び、「秘窯の里」としての雰囲気醸し出している。

窯元に息づく伝統と 温かい心遣いが 里を渡る新しい風になる

山水画を思わせる風景が四季折々の姿を見せる秘窯の里 大川内山。切り立つ山に囲まれた懐かしい町並みに長い年月に燻された歴史と文化を感じます。



めおとしの塔と唐白小屋

大川内山の景観と歴史散策

伊万里市大川内町にある大川内山は、三方を急峻な山に囲まれた秘窯の里です。1670年代頃に鍋島藩の御用窯が築かれ、そこで焼かれた「鍋島」は佐賀県民ならずとも全国に名高い工芸品です。今でもおよそ30の窯元が軒を連ね、技術を伝承し更なる向上を目指し、窯に火を灯し続けています。

狭い谷間に窯元が集積し、その背景に青螺山がそびえる様子は、大川内山を象徴する風景となっています。

また、権現岳神社から望む眺めは伊万里市街地を一望できる絶景です。古くから喉の病に御利益があるといわれており、鳥居の横には有名な水汲み場があり、遠方からも汲みに来られます。

この大川内山は晴れた日も心細みですが、雨上がりの霧の立ちこめる山々はまるで山水画のように幻想的で、まさに往事の絵師たちが皿に写し取った秘窯の里ならではの景色です。

大川内山の入口である関所から陶工橋を渡ると「めおとしの塔」が澄んだ音を響かせており、「日本の音百選」にも選ばれています。その先には水の力で陶石をくたく「唐白小屋」があり、力強い音と動きは耳と目で楽しませてくれます。



ボシ灯ろうまつり 幻想的な光に里が包まれる

気配りと心遣いの「伊万里鍋島焼 窯元おかみの会」

大川内山を訪れる人々を温かく迎えているのが「伊万里鍋島焼窯元おかみの会」です。

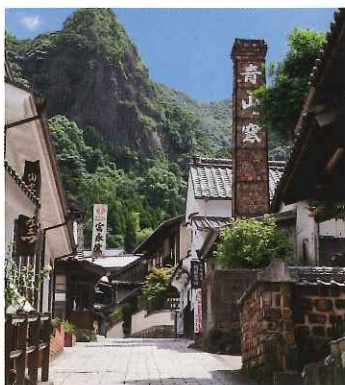
同会では、窯元のおかみさんたちが集結し、訪れた人々を温かく迎え、地域を盛り上げようと数々の活動を行っています。まごころを込めた接客はもちろん、それぞれの窯元の作品を紹介する季節の磁器を使ったテーブルコーディネートなどの提案や、風鈴まつり、磁器ひいなまつりなど、やることは尽きません。

これからも続いていくこと、これから始まっていくこと。

「すべては、『お客様に喜んでいただきたい。』その心遣いから始まりました。」と会長の徳永かつよさん。活動は、地域住民にまで広がりを見せ、植樹や清掃など、地域の環境を

整えることにも繋がっています。

「窯元としての原点である、「鍋島」という伝統を継承していくことと、そこに独自のものを付け加えていくこと。地域を巻き込んで「鍋島」の伝統を新たな視点から発信しています。何度来ても、訪れる度に心地いい、秘窯の里を吹き抜けていく新しい風を感じます。



(右) 造りのレンガ煙突や窯元が立ち並ぶ300年の歴史を感じます。



(左) 伊万里鍋島焼窯元おかみの会 会長 徳永かつよさん [伊万里焼せいら]

伊万里 大川内山 2011 風鈴まつり
期間：6月18日(土)～8月31日(水)
大川内山で開催される夏の恒例イベント。30の窯元が作った風鈴がそれぞれの店先を飾り、山里に涼しげな音色が響きます。

私たちの
景観
づくり

心動かす美しい自然が
新しいコミュニケーションを生み出す

河内やまびこ会 代表 牟田忠儀さん

鳥栖市の中心から、少し離れた九千部山腹の山あいに位置する河内町には、今も豊かな自然が残っています。町の有志が集う、私たち「河内やまびこ会」はこの自然を守り育てる活動を行っています。こども自然塾の開校や、ボランティアの人々で行う清掃運動、また、夏になると川開きも行い、毎年10,000人ほどの人が訪れます。

集落の奥には平成21年に佐賀県遺産に認定された河内大山祇神社が清閑な佇まいを見せています。境内には社殿を覆うようにそそり立つ巨大な古木があり、その中でもまきの木ともみじが長い年月を経てからみあう「夫婦木」が寄り添うように優しくなっています。地域で守ってきたこの神社ですが、この美しい風景をもっと知ってほしいという思いから、会を中心として11月には神社周辺のライトアップを行っています。紅葉の赤と相まって、美しい情景が映し出され、

ライトアップの期間中には、だご汁をふるまったり、こども能やバイオリンの演奏などのイベントを開催したりして地元・県外問わず大勢の方が足を運ばれます。

このような「河内やまびこ会」の活動は、峠に交わる3つの谷から集結した「三谷会（やまびこ会・筑紫会・ヤマメ会）」という新しいコミュニティを生み出しました。毎年ヤマメの稚魚を放流して、魚の育つ川の美しさや自然の大切さを感じてもらい、環境保全に繋がればと思っています。

「三谷会」の強い絆はさらにこの景観を守り続ける力となつて受け継がれていくと信じています。



河内やまびこ会
代表 牟田忠儀さん



(左)特設ステージでの
イベント
(右)夫婦木



古木に守られる河内大山祇神社。

古民家を活かす

旧佐賀城下の西の入り口に位置し、昔ながらのまちなみや水路が残る佐賀市道祖元町。与賀神社の参道に沿って形成されたこの地域は、明治期になると豪商の屋敷が多く置かれ、今なおその面影を残しています。そのような地域の一角に手打ちそば「二八(にはち)」(竹下邸)があります。

屋根つきの板塀と腕木門を構えた風格ある竹まいのこの建物は、築130年の歴史を持ち、佐賀市都市景観重要建造物にも指定されています。

門をくぐり抜け中に入ると、歴史ある建物の濃厚な空気を感じます。

足を踏み入れた先には、黒柿や黒檀を使った柱や欄間が美しく、落ち着いたお座敷が広がり、縁側から眺める庭は、山や野に自生するような木々が自然に植えてあり、とても風流です。

建物はもともと奥様のご実家で、姿を変えず受け継がれ、現在は手打ちそば「二八」として営業されています。ご主人が早朝より打つそばは、湿度や温度などの違いによって毎日打ち方を変えられ、そば粉も季節によって選ばれたものが使われるなど、こだわりが感じられます。

ゆったりと落ち着いた空間の中でそばを食べた後は、歴史を感じるまちなみを散策するのもいいですね。

竹下邸

手打ちそば 二八

佐賀市道祖元町



手打ちそば 二八
佐賀市道祖元町68
電話 0952-22-5879
営業時間 11:30~15:00
定休日 月・火曜

私の好きな景観

赤レンガのある道

鳥栖市本鳥栖町

鳥栖市本鳥栖町の小さな道沿いにレンガの壁があり、この壁には長崎街道を示した案内がある。私が鳥栖へ越してきてこのまちを探検しているときに発見したものである。

これから自分が住むまちには歴史があるんだと実感したレンガ壁。この道が以前は交通の要であり、まちの中心であったのだらうと思うと、この歴史を子供へ引き継ぎ大切にしたいと思った場所である。

これから自分の故郷となる佐賀には、私のまだ知らない美しい場所がある。その場所をゆっくりと探していきたい。

(鳥栖市在住:女性)



一景観講習会一

住民とつくる風景

—宮崎県日向市—



日向市では、日向市駅の建設を通じて、その風景を次の世代まで残すため、住民、企業、専門家、行政のコラボレーションが実践され、新たな風景をつくる取り組みが進められています。平成23年6月の「景観講習会」では、この日向市駅プロジェクトの関係者に、その取り組みについて話を聞きました。みんなできつづくっていく風景とはどのようなものなのでしょうか。その一部をご紹介します。

○市民が関わる風景

南雲—まちづくりを考えた時に、「宮崎だからできるまち」ということを考え、県の特産である杉に注目しました。

駅舎はもちろんのこと、街灯の柱や車止めは杉とかヒノキとか、木でつくることになりました。実際に木材関係者は毎年、ワックスがけをしたり、磨いたりというメンテナンスをします。市民も年に1回大人たちが指導しながら子どもたちも交えてメンテナンスをしています。そしてその後は盛大なもちまきをするのですね。みなさん喜んで帰ります。大抵はなるべくメンテナンスフリーにしてくれと要求されるのですが、ここでは傷んできたら交換もいいんじゃない、という考えです。それは、自治体が森林の木を使うことにつながり、原材料を準備するということも森林から街ができるって考えればいいんじゃないかという、流れになってきました。そのようにして、住民が守り育てるデザインが生まれました。

○景観と人づくり

南雲—高度成長期から作っちゃ壊し、作っちゃ壊して悪くなった杉と人間のいい関係を取り戻すという考えが元

なって、日向市の子どもたちに杉を使った授業をしようということが決まったのです。

日向市駅周辺のまちづくりを題材に子どもたちが街を考え、日向市がこうなったらいいというふうなアイデアを組み込んだ課外授業を開催したのですが、子どもたちが、本当に純真で、一生懸命だったので、だったら私たち大人がもっとその上をちゃんとやらなければいけないと、かなり熱くなりました。市民も、木材関係者もひとつの輪になっていて子どもたちを通じて、日向市の未来へ向かっていく、大きなウエーブができたというのを、感じました。

黒木—日向市のまちづくりを担当して一番良かったのは、やっぱり人に恵まれたということです。大学の先生、コンサルの方、国、県、市の職員、そして市民の皆さんに、本当に真剣に取り組んでいただいた。本当にまちづくりは人づくりだと感じました。

○人は変わる

井上—このプロジェクトに携わったのは44歳のときで、初めはできないと思ってました。しかし、いろいろな会議や打ち合わせに参加して自分の役割を考えた時

に、「プロジェクトを止めない仕組みを作る」ことだと思いました。そこでみんなの前で本気でやりますと宣言した。それが機転になりました。40代でも人は変われるんです。それから大事なことは変わり続けること。それぞれの役割としてではなく、個人として関わるのが大事です。もうひとつは声をかけられた時に忙しいと言わない。面白そうだねとか、いいアイデアだねと言うことがまちづくりの成功の秘訣の第一歩だと思っています。

○記憶に残る風景

篠原—日向市駅は何かあると集まってイベントをやって、市民がみんな楽しんで、そういう場所になりつつあります。しかし、実はそれだけではなく駅はものすごく頑丈に作ってあるので、何かのときには一番安心な場所でもあります。台風が来ても、地震が来ても。だから、何かあったら、ここに逃げてください。そういう場所なんです。

そして、人は何十年か生きていくと、思い出ができてきます。どういう風景が思い出になっているかというと、まず自分の家。それから、通った小学校、中学校、高校、大学。そして、駅があります。通学したとか、通勤したとか。そういう思い出が詰まっている場所。思い出が刻み込めるような駅にする必要もあると思うんです。安っぽいものを作って、すぐ壊されるような駅にしたのでは、施設としては失格だと思います。だから、いかに人々の記憶を受け止められるか。あそこを使って良かったよねという、そういう駅になるかどうかが非常に重要じゃないかと思います。

日向市駅プロジェクトとは？

それまでまちを分断していたJR日豊本線を高架化する事業が立ち上がり、市民、建築や都市の専門家、鉄道関係者、行政関係者が協力し、10年以上に及ぶ期間を経て駅が完成しました。駅舎には、地元の杉が使用され、駅構内も杉を全面に押し出したデザインで統一されています。駅前広場には、交流広場が設けられ、年間を通して様々なイベントが催されており、市民の憩いの場となっています。



篠原 修先生
日向市駅プロジェクトの総括

2006年に東京大学を退官後、2011年3月政策研究大学院大学教授。2011年3月に退官。長崎県「長崎水辺の森公園」、福岡県「龐大橋」など、数多くの公共事業の設計指導に携わるとともに、各種景観検討委員会や景観アドバイザーを歴任し、景観分野の第一人者として活躍している。

井上康志 宮崎県日向土木事務所所長
行政側窓口として、各関係機関との調整

黒木正一 日向商工会議所専務
プロジェクトの基本構想、協働のまちづくり

南雲勝志 ナグモデザイン事務所代表
インダストリアルデザイン(照明、ベンチ等)、景観教育の講師

